

教職をめざす みなさんへ

光が射した職員室

文学部 国際言語・文化学科
准教授 橋本 正志

20年前、養護学校（現在の特別支援学校）の常勤講師として知的障害のある高校生7人の担任を受け持つてすぐ、私のクラスの生徒が他のクラスの生徒にいじめられるという出来事があった。いじめられた生徒の父親は努めて冷静な口ぶりながらも、私を含めた学校側の非を徹底して追及し（我が子を思う親心からだろう）、校長宛てに批判の手紙を書き送った。対応次第では公表も辞さない、といった厳しい内容であった。すぐさま学年会が催され、今回の対応について話し合われた。赴任したばかりの私は一人責められるような思いで、辛くいたたまれない学年会であった。

私は誰に相談することもなく、一人で悩みにくれた。気力が衰えたせいか風邪を引き、その後2日ほど欠勤した。3日目に何とか学校へ行ったものの、授業には全く身が入らなかった。責任を負うことばかりを考えていたのである。もし私が来なかったら、生徒は普通に学校生活を送ることができていたのではないか。なぜこの学校に配置されたのか。何も見えない日々が続いた。経験もない若い教師の未熟さゆえに、生まれつきハンディキャップを背負っている生徒の心に与えた傷の深さを思い、辞職することも脳裏に浮かんだが、私にはそうするだけの勇気もなかった。精神的にも肉体的にも、どん底であった。

そんな私を救ってくれたのは、N先生の一言だった（理科の先生で、俳優の中井貴一氏と温水洋一氏を足して2で割ったような風貌だったので、仮にN先生と呼んでおこう）。授業が終わり、ほとんど人気のない職員室で、机を一つ隔てて座っておられたN先生に呼び止められたのは、私がまさに帰ろうとした時であった。

「先生。今はとても辛いと思います。でも決して

先生一人だけの責任ではありません。今までの小さなことが少しずつ積み重なってこうなったのです。すべてが有機的に結びついて、積み重なった結果です。これは学年全体の問題であり、学校全体、ひいては家庭の問題でもあります。むしろ大切なことは、先生がこれからその生徒に何ができるかだと思います。生徒のためにも、先生は顔を上げて真剣にそのことを考えなければなりません。先生が元気でない、生徒も元気が出ないですよ。だから、どうか前を向いて歩き出してください」

N先生の話聞いた瞬間、私の頬に思わず涙が伝った。私はハンカチを取り出しながら、小さく、しかし精一杯の声で「ありがとうございました」と礼を述べた。私は学校の自転車置き場へ駆けるように向かい、暗くなった町を下宿へとひたすらペダルを漕いで走った。先生の一言で、私は救われたのだった。

その後、私が担任として何をしたのはあまり覚えていない。ただ、できるだけその生徒と関わり、家庭訪問なども含めて懸命に「自分ができること」を同じ学年の先生たちとともに取り組んだように思う。

やがて3月末となり、私の任期は終了した。離任式の後、送別会が催された。他に異動をする10人ほどの先生に混じって、私も末席に着いた。気の利かない私は、お世話になった先生方にお礼を申し上げることもせず、ただ時の過ぎゆくまま座り続けていた。

と、思いがけずN先生が私の前に歩んで来られ、私の顔を真っ直ぐ見ておっしゃった。

「先生、ぜひもう一度この学校に戻って来てください」

驚くとともに、ふたたび救われたような気がした。私が来たことは決して無意味ではなかったのだ。まだ生徒のために尽くせることが残っていたのだ。これまでの辛さや苦しみを受け止め、すべてを前向きに受け入れることができた瞬間であった。

*

今でも時々、職員室でN先生が掛けてくださった言葉を思い出す。「辛く苦しいことがあっても、決して自分一人だけの問題ではない。人が生きていくからには、あらゆることは繋がっていて、ときに痛みを共有しなければならないこともある。目の前に困難に遭い、助けを求めている生徒がいる限り、少しでもその苦しみを和らげ、ともに歩いていくにはどうしたらよいかを皆で考え、辛さを乗り越えて一

歩前へ踏み出さなければならぬ」と。教職に就いて生きるとはどういうことか。その一つの大切な姿勢をN先生から教えていただいたのだと思っている。

「教」と「学」と

文学部 史学・文化財学科
准教授 宮崎 聖明

「教學半」という言葉がある。「教」は「教」の古字、「學」の方は「学」の旧字体として目にしたことがある人もいるだろう。書き下すと「教えるは學ぶの半ばなり」となる。儒教の古典である『礼記』などに見えるこの一文は、「教えることの半分は学ぶことである」と一般的には解釈される。この言葉は、「教」と「学」という二つは表裏一体であるという、ひとつの真理を表しているように思える。

例えば、言うまでもなく教師の対極に学生がいてはじめて教育は成立する。漢代の字書である『説文解字』は、「教」という文字を「上所施、下所效也（上の施すところにして、下の效う所なり）」と説明している。「效」は「ならう」「真似をする」という意味である。つまり「教」とは、「上の者が施し、下の者がそれにならう（学ぶ）」こと、というわけだ。教師が独りよがり話しても学生が学んでくれないければ、それは「教」ではない。

しかし、一方的に教えるだけだったり、真似をさせるだけだったりするのは不十分だ、というのもよく言われることである。教育には「知識を与えること」のほかに「問題意識を喚起すること」という目的がある。終わったあとに学生が「何もかも全部わかった！」となる授業は、それはそれで素晴らしいかも知れない。しかし、質問が全く出ないというのも考えものである。私の経験を言わせてもらおうと、「今日は（も！）なんか上手いかへんなあ」と思いながら授業をしていると、その回のミニツツペーパーに書かれる質問はたいして少ない。「教えることで新たな学びの機会を与える」というのも大事である。

逆に、学生から教師が学ぶ、ということもあるだろう。私の研究室の机上には『漢語教与学詞典』という現代漢語（中国語）の辞書がある。英文タイト

ルは“A CHINESE DICTIONARY FOR LEARNERS AND TEACHERS”。「教与学」とは、「教師と学生と」という意味にほかならない。「教師のための辞書」とはどういうことか。この辞書には外国人が犯しがちな文法・語法の間違ひが多く紹介されていて、中国語を学習する外国人だけでなく彼らを指導する中国人教師にも役立つように作られている。つまり、この辞書によって中国人教師は、「外国人は何が分かっていないのか」を知ることができるのである。

教える側にとっては当たり前のことでも学ぶ側にとっては当たり前ではない。学生が何を求めているのかを学ぶ、どのように教えれば良いかを学生から学ぶ。「学生の立場になって考える」とはこういうことだろう。みなさんも教え続けながらこのような気づきを得ることを忘れないでほしい。

また、教育には、「学ぶ者を教える者にする」という働きもあるだろう。みなさんには教職を志すようになった「きっかけ」というものがそれぞれあるだろう。その中で、「出会った先生に感銘を受けた」という経験を挙げる人は少なからずいるのではないか。とするならば、教師となったあなたに感銘を受けた誰かが教師を志す、ということだってあるかもしれない。あなたが教師となり、あなたに出会った学生が、あなたと同じ道を志す、というのはとても素敵なおことに思える。そのためには何よりあなた自身が教えることを「楽しい」と思いながら教壇に立つことだ。実際の教育の現場は楽しいことばかりではない。しかし、あの時、「先生（のよう）になりたい」と思った気持ちを忘れずにいれば、それは誰かにきつと伝わる。

そして、この「学ぶ者を教える者にする」ことを使命としているのが、ほかならぬ教職課程に携わる先生たちである。この使命感をもってみなさんの前に立つ彼らは、ここに駄文を書き連ねている私などよりよっぽど「教」と「学」とに精通している方々である。必ずやみなさんの道標となってくれるはずだ。

確かに「教」と「学」とは表裏一体のようである。まずは「教えるために学ぶ」ことに全力で取り組んでほしい。そして教師となり、「教えることで学び」、それらの学びを活かして「学ぶこと、教えること」のよこびを次の世代に教える。そんな未来があなたに訪れんことを。